

# 井上眼科だより

INOUE GANKA DAYORI

井上眼科病院  
災害支援チーム  
活動報告

特別号  
2011.7

平成23年3月11日、東日本大震災(東北地方太平洋沖地震)が発生し、東北地方太平洋側を中心に甚大な被害をもたらしました。地震発生直後には人命救助を目的とした災害派遣医療チーム(DMAT)が全国から結集しました。災害の急性期、亜急性期を過ぎて慢性期に入った今、電気、水道などライフラインの復旧は進んでいますが、まだ多くの方々が避難生活を強

いられています。被災地には、命は助かったが生活の基盤を失い、生活の質が極端に低下している被災者が数多くいます。我々井上眼科病院グループは被災者のために少しでも力になりたいと考えました。そこで井上眼科病院災害支援チームを結成し、NPO法人日本ユニバ震災対策チームの協力を得て、活動を行いましたので、ご報告いたします。



がれきの気仙沼港。陸に打ち上げられたままのフェリー。

災害支援チーム

## 第一グループ(5月24日~26日)



森山涼  
(医師)



板谷真平  
(看護師)



稲井隆太  
(視能訓練士)



町田幸夫  
(眼鏡加工士)

## 第二グループ(6月18日~20日)



藤本隆志  
(医師)



高橋篤史  
(看護師)



柴田拓也  
(視能訓練士)



西久保誠司  
(視能訓練士)

## 派遣先

気仙沼湾に浮かぶ、東北地方最大の有人島・大島です。人口約3,200人が暮らしており、もともとカキやホタテの養殖やきれいな砂浜が有名な島でしたが、今回の津波で壊滅的な被害を受けました。気仙

沼港は津波直後に重油タンク設備が破壊され、流出した油に引火し大規模な火災が起こりましたが、津波の引き波によってその火は大島にも燃え移り、広い範囲で山火事が起こりました。



## 期間・活動内容

### 第一グループ(5月24日~26日)

平成23年5月23日夜に診療機材、薬剤、食料を積んだ車で東京を出発、翌24日早朝に気仙沼港に到着しフェリーで大島に入りました。島の災害対策本部長、出張所所長の方に現在の状況を説明していただき、早速その日の午後から検診を開始しました。検診に来られた方の人数は初日53人、2日目143人、3日目133人、3日間合計で329人でした。もともと島には眼科診療所がない為、震災前、島の人々は本土までフェリーで渡って眼科を受診していました。今回の津波によりその本土の眼科医院も流されてしまったため(院長先生はご無事で伺っています)、島民の方はかかりつけ医がなくなって困っている状態でした。今回の検診では幸い重傷の方は少なく、「普段使っている点眼薬が足りなくて不安」

「眼鏡が流されてしまった」「緑内障があり眼圧を計って欲しい」「糖尿病があるので眼底検査をして欲しい」という方が多くみられました。また、購入の際に医師の診察が必要なコンタクトレンズが手に入らず困っている方も来られました。本土には被災された眼科医院の他にも総合病院で眼科を受診できますが、フェリーを降りてからしばらく距離があることや、現在はいつもより混雑しているという理由で眼科にはかからず我慢しているという方がしばしばみられました。また、特に症状がなくても健診の目的で来られた方、中には眼科自体が初めてという方も来られ、老眼鏡を初めて使用してその見え方の良さに感激して下さった方もおられました。事前の予想よりも多くの方が受診され、限られた日程の中でのなるべく多くの

方を診察しようということで急きょ2日目に夜間診療も行いました。夜間には昼間仕事をしている方や学生の方の診察を行うことができました。診察終了時には診断結果や処方内容を書いた用紙をご本人に渡すことで、次の医療機関との連携がスムーズになるように工夫しました。



初日6月18日は午前9時から午後9時までの診察で、160人の方が検診に来られました。2日目117人、3日目85人、3日間合計で362人となりました。診察は日本ユニバの協力もあり、非常にスムーズな流れで行うことができました。80㎡ほどの広さの空間に待合室、検査エリア、診察エリア、薬剤配布エリアなどを時計回りに設置したため、特に混乱などが起きることもありませんでした。

初日に緑内障の患者さんが集中した

ことをのぞき、全体を通してみると白内障や眼精疲労、ドライアイでの来院がほとんどであり、また、2人ほどではありませんでしたが眼瞼痙攣と思われる方もいました。今回の支援は2回目ということもあり、

初回の支援で反省点となった涙道の通水検査器具を持参したことや、眼鏡やコンタクトの持参数を増やしたことから、非常に多くの患者さんのニーズに応えることができたと思います。



## 今後について

震災後に刻々と状況が変化中、新聞、テレビなど眼を使って情報を得ている方がほとんどです。その眼を少しでもより快適に使うことが出来れば生活の質も上げることが出来ると思います。もともと医師の少ない地域がこのような大災害に見舞われたことで、医師と患者の距離がより遠いものになっていました。慢性期に入った今、支援を行うことで現

地の復興の妨げとなってはいけませんが、少しでも人的余力のある病院が適切な時期に派遣を行うことが現地の住民の方々にとって救いになれば幸いです。また、気仙沼の眼科が復興するにはまだ時間がかかることなどから、来院された方々は次回の支援を強く希望されていました。それに対する対応も現在検討中で、今後も、より多くの患者さまのニーズ

に応えていく必要があると感じました。

最後にこのような支援チームを立ち上げ、派遣に協力して下さった井上眼科病院グループ、NPO法人日本ユニバ震災対策チームの方々、同行した当院のスタッフや現地の若手ボランティアの方々に心より感謝申し上げます。

### 鬼怒川先生 寄稿

## 東日本大震災と井上眼科病院の災害支援チーム

鬼怒川眼科医院院長 鬼怒川雄一



鬼怒川 雄一 先生

私は井上眼科病院で研修させて頂き、その後父の後を継いで現在仙台の鬼怒川眼科で診療しております。東日本大震災後、3ヶ月が過ぎましたが、まだ余震が続いています。この度は井上眼科病院から理事長先生を初めたくさんの方の有志の先生方から多大のご支援を頂き感謝の気持ちで一杯です。厚く御礼申し上げます。去る3月11日午後2時46分、診察室にいた私は強烈にまた長い時間の揺れに驚き踏ん張っておりました。すぐ停電になり非常灯だけが灯り、カルテや検査機械が倒れた中に、辛うじて患者さんやスタッフの無事が確認できた時

はほっと胸をなで下しました。13日深夜に電気が復旧し、その時初めて津波の被害をテレビの映像で見愕然としました。宮城県では、特に石巻市の眼科の先生方が大きなダメージを受けられ、中には診療所と共に流されて亡くなられた方もおります。公共の交通機関が停止している中、従業員も集まらない状態でも翌日から町医者として診療所の明かりを消さぬよう頑張っておりましたが、4月7日の二回目の大きな余震は肉体的にも精神的にもダメージを受けてしまいました。被災の翌週に県眼科医会からのボランティアとして沿岸への呼びかけがありま

したが、自分達の診療所の復旧や仕事のことで精一杯でした。そんな中、井上理事長先生から宮城県への眼科の災害支援チーム派遣という電話報告を頂き感動しました。遠征の最終日には派遣チームの皆さんが仙台によられたので、私も夕食をご一緒することができました。井上理事長先生が態々駆けつけて下さったので感激でした。皆さん頼もしく任務達成の安堵な表情を浮かべておりました。宮城県にとって誠にありがたい事でごございました。井上眼科病院の益々のご発展を祈念し、今後共ご交誼の程お願い申し上げます。